

第160回 日文研フォーラム



# 旧満州における 戦前日本の町づくり活動

Prewar Japanese City Making in Manchuria



ビル・スウェル

Bill SEWELL

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄





● テーマ ●

# 旧満州における 戦前日本の町づくり活動

Prewar Japanese City Making in Manchuria

● 発表者 ●

ビル・スウェル  
Bill SEWELL

カナダ・セントメアリー大学助教授  
Assistant Professor, Saint Mary's University

国際日本文化研究センター外国人研究員  
Visiting Research Scholar, Int'l Research Center for Japanese Studies



2003年4月8日 (火)

## 発表者紹介

ビル・スウェル

Bill SEWELL

カナダ・セントメアリー大学助教授

Assistant Professor, Saint Mary's University

国際日本文化研究センター外国人研究員

Visiting Research Scholar, Int'l Research Center for Japanese Studies

## 略歴

2000年 5 月 Ph.D. (ブリティッシュコロンビア大学)

1993年 6 月 フレーザーバレー大学講師

1996年 9 月 レークランド大学日本校助教授

1999年 9 月 ブリティッシュコロンビア大学講師

2000年 9 月～現在 セントメアリー大学助教授

## 著書・論文等

“Japanese Imperialism and Civic Construction in Manchuria: Changchun, 1905-1945,” unpublished Ph.D. dissertation, University of British Columbia, 2000

“Railway Outpost and Puppet Capital: Urban Expressions of Japanese Imperialism in Changchun, 1905-1945,” in Martin Bunton, Gregory Blue, and Ralph Crozier, eds., *Colonialism and the Modern World*, Armonk, NY: M.E. Sharpe, 2002, pp.293-298

“Postwar Japan and Manchuria,” in David Edgington, ed., *Joining Past and Future: Japan at the Dawn of the Millennium*, Vancouver: University of British Columbia Press, 2003, pp.97-119

## 1. 序言―日本人町づくりの潜在力

電線やコンクリートの建物が入り交じっていない日本の都市を想像してみてください。立派に聳える鉄鋼製の建築ではなく、あまり大きくない建物が整然と並び、魅惑的で伝統的な外観を呈しています。広い道路は分かりやすくデザインされ、もつれた送電線は埋められていて全く見られません。道路の両側に歩道があり、そこに並木が植えられていて、公園も広々としています。人口対緑地の比率はほぼ北米と同じぐらいです。

このような町づくりの話題は最近日本全国でよく聞きます。こんな話を聞くと、よく近代的とか近未来的とかという印象を受けられるでしょう。自然の多い場所にたてられる、モダン・テクノロジーいっぱい幅広い家、これは新聞の記事や、電車の中の広告、あるいはテレビのCMでよく見かける光景です。早くこんなところに住みたいというのは、皆が皆の望むところでしょう。

日本の町づくり活動の裏には、歴史的な経験の積み重ねがあり、かつてこのような「日本」の都市が存在しました。でも、それは戦前の日本帝国にあったため、戦後の日本社会ではすぐ忘れられてしまったのです。例えば、ここに見えるような都市が一時存在していました。ここは旧「満州国」の国都「新京」だった場所で、今は中国東北部の

長春という町です。そして先に言いましたようにここは戦前の日本帝国が海外で作った植民地であった為に、その町づくりと背後にある歴史については戦後の日本社会においてはもうすっかり忘れられてしまったようです。

しかし、ここ一〇年ぐらい、研究者たちがこの話題を取り上げ、新しい研究成果を挙げました。例えば、越沢明の『満州国の首都計画』という本はその好例の一つです。『東京の現在と未来を問う』という面白い副題もついています。越沢の分析によると、帝国主義の経験は満州にとって有益なものだったのみならず、その後の日本の都市計画にも多大な影響をもたらしたというのです<sup>1</sup>。確かに、越沢の著作は殆ど満州に焦点をあてたけれども、同時にそれはまた彼の東京の都市計画史研究の目標に繋がるものでした<sup>2</sup>。面白いことに、越沢の一連の仕事に多くの関心が集まりました。まず、学界の人が興味を示しました。『近代日本と植民地』というシリーズにおいてその成果が載せられ、越沢の評判が広まりました<sup>3</sup>。そして、世論も気が付きました。「新京」についてのこの著書は一五年まえに出版されたものですが、去年になってまた文庫本として刊行されました<sup>4</sup>。さらに、旧満州を描いた漫画本にも越沢のまえがきが寄せられ、注目を集めました<sup>5</sup>。(ちなみに、この旧満州を背景にした漫画シリーズは今でも続けられています。)

一方、越沢のような研究は危険だという批判もあります。例えば、西澤泰彦は越沢の

著作を書評して、彼の考え方には色々な問題があると指摘しました。まず第一に、帝国主義の悪い側面を全く無視してしまつたという点です。第二に、越沢の分析においては、民間人の帝国主義活動をまったく許しているという点です。

この意見は、もつと広い意味での議論を反映しています。つまり帝国主義の本質に関する議論です。戦後の世界において、帝国主義が基本的に進歩的な影響を残したと言う人もいます。例えば、植民地において帝国主義者たちが道路や工場、病院等を沢山作りました。一方、他の研究者は帝国主義という現象は基本的に屈辱的な影響しか残っていないと主張し、その支配下において経済略奪もあり、人種差別もあり、評価すべきものはまったくないと指摘しています。このように帝国主義の本質に繋がる植民地の都市計画に関する議論は未だに膠着状態に陥つてしまっています。

この現象は勿論満州にも当てはまります。『満州開発四十年史』という本があります。がこれは恐らく、満州における日本帝国主義を記録するもつとも有名な本でしょう。勿論、中国で出版された書籍の中には、これと正反対の見方を示す本が沢山あります。でも、日本においては、『満州開発四十年史』は特別な影響力を持つているようです。今まで、満州を研究する日本人は大体にこの本から勉強を始めるのだそうです。しかしこの本を読むと、満州における日本帝国主義の活動は、欧米のそれと比べると、基本的に

現地の民衆の利益になったという印象を持ちます。勿論、最近の日本の歴史家はこの見方を批判しているけれども、こうした考え方がまだ根強く残っているのも事実です。

それで今日は、満州に於ける町づくりの経験をもう一度考えてみて、この議論の膠着状態から一步踏み出すことを試みたいのです。その上で、満州の町づくりの経験と今日の日本の町づくり活動との関係についても検討してみたいと思います。

## 2. 「植民地の近代性」(“Colonial-Modernity”)

戦前の町づくりというのは面白い話題です。日本は江戸幕末、農民政家から、工業社会へと進みました。その過程において、町づくり活動の指導者はたくさん居たのですけれども、一九二〇年代に限って見ると、後藤新平は恐らく一番有名な人だったと思います。言うまでも無く後藤新平は東京市長として後世にきわめて大きな影響を及ぼした人でした。ところが、後藤の影響はこれだけには留まりませんでした。彼は様々な分野において特別な存在でした。まず医者として、近代科学を代表していました。また、文人でありながら台湾総督府民政局長を勤め、のちに初代満鉄総裁としてもその手腕を振りました。そして、彼は近代社会を築き上げることに興味を示しました。帰国後、大正

六年（一九一七）に都市研究会を創設し、『都市公論』という雑誌を出版しました。この雑誌において日本朝野各界の都市計画者は自分の意見を発表しました。後藤は昭和四年（一九二九）に亡くなるまでこの都市研究会の議長を勤め、後輩の都市計画者を育てることに熱心でした。

ところが、植民地における町づくり活動は日本本土のそれとは違っていました。本土より、海外における町づくりはもっと自由に進めることが出来ました。それは植民地を支配する官僚たちが本土の政府の力や世論から逃れることが出来たからです。専制政治体制ではなかったけれど、比較的に独立性のある政権を築くことが出来ました。こういう事情もあって、歴史家たちは「植民地の近代性」というテーマを取り上げることが多く、特に最近はこのについての論文が増える一方です。そしてこの流行は、満州だけでなく、厳しい植民地政策が行われた旧朝鮮についても見られます。松本武祝によると、ここ一〇年ぐらいの朝鮮に関する出版物にこのような考え方がよく表れています<sup>8</sup>。

そして、「近代」という現象についてもいろいろトラブルがあります。先ほどお話ししました帝国主義の評価に関する膠着状態と同じように、「近代」という言葉もさまざまな意味が含まれています。新しい工場や学校、それに新しい経済と教育制度、町づくりが含まれている一方、新しい軍事技術と軍事的可能性も含まれているし、新しい警察

の統制も含まれています。ですから、これらのすべての要素を考慮した上で、「植民地の近代性」を考える必要があると思っています。

好例の一つとして、後藤新平——彼の軍閥の人脈を忘れてはいけません。日本帝国の近代性は、始めから、軍事の側面も含んでいました。近代的な軍隊を支えるには近代的な工場・技術・社会組織が必要です。従って、どのように近代社会をつくりあげていくかという課題の為に満州は実験台としてとても重要な場所でした。具体的に言えば、日本本土に比べ、満州にある日本町のほうがより近代的な市街化計画や電力、衛生などの諸制度を推進していました。

これはとても重要な一面です。満州は日本帝国の一部だったけれど、近代性を造り出す場所でもありました。フランス帝国ではこのような活動を “la mission civilisatrice”（文明化する使命）と呼びました。いわばこれも帝国主義の一つの側面でした。

他の日本の植民地と比べて、満州は特別なケースでした。日本から近い地域にあるため、海を渡って行った日本人は大勢でした。在満日本人の一般市民の人口は明治三九年（二九〇六）に一六、六二二人しかいなかったのですが、昭和五年（一九三〇）になると、二三三、〇〇〇人を越え、昭和一五年には一、〇〇〇、〇〇〇人にまでのぼりました。日本軍に加え、日本の大手企業の職員や、官僚、そして民衆たちも自分の夢を託し



て満州に渡りました。今は、満州開拓運動はよく知られていますけれども、実は満州に行つた日本人は殆ど新しい町に住んでいました。戦争が終つた時、およそ三二〇、〇〇〇人の日本移民だけが満州の農村にいました。<sup>10</sup>

これは先程言つた一、〇〇〇、〇〇〇人の三分の一にしか過ぎません。それに、日本からの投資も殆ど新しい都市で行われていました。

満州に於ける日本の町づくり活動は多くの都市で行われました。<sup>11</sup> もっとも有名なのは大連や奉天などの大都会でしたが、多くの小さい町でもその活動が見受けられました。例えば、安東、撫順、四平街、長春、佳木斯などの町では日本人が新しい都心を造り、近代的な都市計画をこころみていました。今日は、満州の中心であつた長春を例に、日本人による町づくり活動をすこし具体的に見てみたいと思います。長春を選んだ理由は勿論史料が残っていることありますが、その上に、長春は旧満州にとってとても重要な場所だつたからです。<sup>12</sup>

長春における日本帝国の活動は二つの時代に分かれます。一つは満鉄時代で、もう一つは満州国時代です。表面的には、この二つの時代に見られる日本の帝国精神は大きく違つていました。満鉄時代には、長春は満州鉄道のもつとも北の終点であつたけれども、その後、満州国時代に入ると、長春は傀儡国家である満州国の首都「新京」に変身しま

した。従つて、長春には二種類の町づくり活動が見られ、そこに反映された植民地の近代性もそれぞれ違つて見えるように見えます。

### 3・満鉄の付属地

都市をテキストとして読む、その可能性をめざして、私は博士論文において長春を中心にその都市計画や建築に焦点を当てて分析しました。長春に行つて都市インフラストラクチャーや建築物を調査すると同時に、そこに含まれるアイディアなど精神的なものについても考察しました。そして、最初に興味を持ったのは、日本人が植民地の領土を具体的にどのように造つたか、ということでした。

これはヨーロッパ式都市計画の良い例の一つです。明治二七年（一八九四）、東京大学土木工学出身の加藤与之吉が長春の満鉄の付属地を合理的に設計したものです。全体としては長方形ですが、駅前広場を中心に、道路は放射線状に広がつていく。この設計によつて、駅と周辺の商業地区は自然に町の中心として注目されるようになりました。その上、最初から公園用地の重要性が認められ、付属地の九パーセントも公園の為に設けられました。これは一番大きい西公園です。東京大学の白沢保美教授によつて設計さ

れました。<sup>13</sup>

長春は満州鉄道の最北端にあり、ロシア帝国の東清鉄道と接していました。面白いことに、満鉄は十八世紀からある中国人町と明治三六年（一九〇三）に建てられたロシアの東清鉄道付属地の間に自らの付属地を建てました。ロシア帝国の中国人に対するもつとも基本的な方針は segregation（分離）の政策でした。でも満鉄はある程度中国人と協力する意図で中国人町の近くにその付属地を置きました。中国人に日本のリーダーシップを認めさせることが満鉄の狙いでした。これは満鉄初代総裁後藤新平の考えでした。台湾統治の経験を持つ後藤は帝国の「生物学の原理」という方策を考案しましたが、それは一方では中国人の経済活動を促し、地方行政の継続を許しながら、他方では中国人に低い地位しか与えないというものでした。<sup>14</sup>

後藤のこの「生物学の原理」はとても重要なもので、それが長春付属地の元来の設計者の判断を覆しました。木製車輪の馬車が新しい道路のマカダムを壊すのを恐れて、設計者は当初付属地の道路で中国人の馬車の通行を禁止しようとしたが、後藤はそれを許しました。<sup>15</sup> その結果、付属地と中国人町の間には道路や建物がすぐに建てられ、そしてその一部はやがて「商埠地」、即ち中国人町と満鉄付属地を結ぶ場所となりました。

それから、日本人は長春で何を建てたかというと、最初は帝国にとってもっとも重要

な建物である警察本署と郵便局でした。その建築家は松室重光という人でした。西澤泰彦の研究によると、松室は満鉄行政の重要な世代を代表する一人でした。後藤新平と同じく、彼の代表する世代は、日本帝国の一流大学を卒業し、官庁や企業に就職して、それから日本の植民地に赴任する人たちでした。<sup>16</sup> 松室の場合は、建築家として、『満州建築雑誌』に色々な論文を発表しました。長春の新しい建物は明らかに「文明開化」を表していました。長春駅はその良い例でした。この建物はそのままにヨーロッパ様式のまねではなく、寧ろ、日本人が独自のセンスをもって世界に参加しようとしていることを表わしています。その建築様式は“historical eclecticism”（歴史的折衷主義）と呼ばれ、ヨーロッパでも新しい様式でした。同じように、大正三年（一九一四）に建てられた東京駅もその例の一つです。ただ、建築様式は同じだったけれど、東京駅の方は技術的な新機軸を代表していました。欧米の建築家たちは、地震地域であんな大きなドームを造るのは無理だと思っていましたが、日本の工学者たちはついにそれを現実にししました。

この点はとても重要です。戦前の日本は欧米からさまざまなものを取り入れたけれども、いつもそれを日本的なスタイルに置き換えていました。つまり、日本の近代性是一方では外来のもの、一方では国産のもので、とてもユニークな性格を持っています。だ

から、当時の新しい建築様式を見ると、この点を忘れてはならないと思います。つまり、その新しい様式の、日本と欧米における意味の違いです。たとえば、長春のヤマトホテルはアール・ヌーボー様式で造られました。しかし、欧米では、アール・ヌーボー様式は革命的な意味を持っていたけれども、殆どの日本建築家はそんなことを思っていないでした。寧ろ、新しい様式にチャレンジする自らの実力を示したかったのです。そして長春ではこのような実力を示すことが必要でした。三〇〇キロぐらい離れた北の哈爾濱にこのアール・ヌーボー様式の建物が多かったからです。日露戦争の後もしアにたいするライバル意識が続いていました。

一九二〇年代に入って、もう一つの建築様式が世界中で人気を呼び起こしました。“International style”（国際様式）でありました。その名前は昭和七年（一九三二）に出版された本に由来しています。この本によると、日本の建築家もこの様式をたくみにと入れました。そして、平成七年（一九九五）の再版によると、初版には日本の例は一つしかなかったけれども、実際は、日本の例がかなり多かったといえます。<sup>17</sup>長春に建てられた朝鮮銀行の場合ですが、その作業領域がより広がり、外観もよりシンプルになっています。ほかにもこの様式で建てられた建物が多く、昭和五年（一九三〇）に完成した長春電話会社の本社はその代表的な存在と言えます。

然し、世界的に國際様式が主流になりつつある中で、所謂「對華二一カ条」の要求が通った後、在滿日本人はあまり中国人と協力しなくなり<sup>18</sup>ました。たとえば、長春の南で起こった万宝山事件がつまり、その現われの一つです。<sup>19</sup>また、長春の滿鉄付屬地で、日本人町の大通りは元々中国語の名前がありました。長春駅から、銀座のような三六メートルもある広い「長春大街」（チャン・チュン・ダー・ジェー）が南に向かつていました。二つの円形の広場に向かった斜めの「西斜街」（シー・シェー・ジェー）と「東斜街」（ドン・シェー・ジェー）という二七メートルの広い大通りもありました。しかし一九二〇年代になると、これらはそれぞれ「中央通り」、「敷島通り」、「日本橋通り」という日本語の名前に変わりました。<sup>20</sup>この名前の変化は日本人の自信が増したことを反映するとともに、中国人とはもう協力したくないという気持ちも表していました。満州事変をきっかけに、日本人の中でこんな気持ちが拡がっていました。さらに、全満州に日本の影響を広げようとする満州青年連盟のような組織も昭和三年（一九二八）に設立されました。<sup>21</sup>これによって後藤新平のつくった満州のヴィジョンは完全に崩壊してしまいました。また次に来る満州国時代はまさに帝国主義的な近代性に満ちていました。

#### 4. 「満州国」の国都「新京」

そしてその後、日本は「国防国家」になり、いよいよ「全面戦争」の準備にはいっていきます。これはよく知られていることです。ところが、その実験が既に満州で行なわれていたことはあまり知られていないでしょう。勿論、所謂満州国を成立させる為に軍事・政治・経済の支援が必要だったし、都市計画と町づくりも必要でした。長春は満州国の国都となったため、都市計画と町づくりは長春に集中して行われました。というのは、奉天と大連では満鉄と日本外務省の影響が強かったので、関東軍が国都長春で自分のヴィジョンを思う存分つくり出すことが出来なかったからです。そして、長春は「新京」と改名されました。

昭和七年（一九三二）初頭から、満州国・新京は五ヶ年計画によって造られはじめました。国都の設計・建設事務は「国都建設局」という専門組織に任せられ、<sup>23</sup>その職員は満鉄社員と関東軍の代表者からなっていました。最初から、近代的な国都を目指していました。壮大な外観で、規模も大きかったです。元々の中国人町は八平方キロメートルしかなく、満鉄付属地もわずか五平方キロメートルでしたが、新京は二〇〇平方キロメートルもありました。設計によれば、新京はまさに「新興満州国の首都として」の

「近代的文明都市」になる予定でした。<sup>24</sup>

スペースの使い方を見ると、国都建設局の目的が理解出来ます。規模の大きさは新国家の権力を象徴し、雄大な建築は新しい文明の精神を象徴するものです。同時に新京はまた近代的な国都を代表する都市としての目的もありました。この意味から言えば、関東軍は満州を統制する為に、軍事力と傀儡政権だけに依存していたわけではありませんでした。それらに加え、傀儡政権のシンボルである溥儀に関しても近代的な国都の一つの道具として利用していました。

国都新京の建設計画にざっと目を通すと、北京の紫禁城のように形作られていることが分かります。たとえば、宮殿が南に向かっていているところです。また溥儀の宮殿の前にも紫禁城のような「前朝」が造られました。しかし、両者はちょっと違いました。紫禁城の場合は壁に取り囲まれた場所ですが、順天広場の場合は大きくて露天の広場が広がっていました。紫禁城の「前朝」は臣下の謁見を迎える為であるのに対して、新京の「前朝」は市民大会の為に、近代的な政治の目的が明らかです。そして紫禁城と同じく、順天広場から順天大街は南に向かっていているけれども、紫禁城に見られるような官舎の中の狭い歩道はなく、「偉大」な建物に沿って広い本通りが広がっていました。<sup>25</sup>

順天大街の建築物はアジアの建築伝統を反映しました。<sup>26</sup>越沢明はこの建築様式を「興



亜式」と呼んでいます。(でも、満州国時代ではこの言い方は殆どしませんでした。) 構造体として昭和十一年(一九三六)に建てられた国務院は一つの好例です。同じ年に完成された国会議事堂とよく似ているけれども、屋根はアジア趣味を示していました。他の建物もほぼ同じでした。国務院の手前に安部(後の軍司令部)の本部が立っています。順天大街のもっとも南の端に満州国の合同法院があります。その間の官庁街にほかの建物もたくさん並んでいます。そしてその真ん中に順天公園が囲まれています。

この所謂「興亜式」は伝統と近代を一つに融合しようと試みた様式です。この町づくり活動は満州国の目的を具体的に表わしています。つまり伝統的な価値体系を持つ近代国家です。そして、欧米の構造体にアジア様式の屋根を被せることは、欧米のシステムをアジアの栄冠によって支配するという意図をきわめて明白に象徴していると思います。

しかし、この活動において伝統的な要素はほんの少ししか顔をのぞかせていませんでした。町づくり活動が一つの全体的な世界観によって行われたわけではないので、新京の町づくりはある意味では、表面的なものでした。一つ風水の例をあげますと、紫禁城の場合は四つの寺院の真ん中に位置し、南の天壇と北の地壇の間、そして西の日壇と東の月壇の間にそれぞれ同じ距離がありました。この真ん中の場所はとても重要で、天子

の威力がこの場所から全国へと届き、天下の太平を保つことが出来ました。けれども、新京の場合はちよつと違っていました。宮廷の西の方にお寺はなく、北に忠霊塔が、南に建国廟があり、そして川の東に、關帝廟が立っていました。關帝廟は宗教と関わりがあったけれども、他の建物は殆ど近代大衆社会に利用される為のものでした。しかもそれぞれの位置は風水的に正確ではありませんでした。その上に、新京の都市の本当の中心は宮廷ではなく、大同広場でした。これは「シビック・センター」という場所です。ここから国都の計画者たちは伝統性より近代性を重視していたことが分かります。

大同広場は少し地勢の高い所に位置し、そこを幅五四メートルある本通りの大同大街（元中央通り）が通過し、交通の面ではとても便利な設計となっています。本通りの間には大きい建物が建てられましたが、しかしそれは「興亜式」のように建てられませんでした。例えば満州中央銀行は世界中の銀行と同じ外観を示していました。そのとりには同じように近代的な満州電信電話会社本部の建物がありました。中国伝統のものである獅子像もこのように近代的に造られていました。

大同広場周辺の建物の中で、アジアの伝統をよく反映するものが一つありました。アジア的な屋根をかぶせた首都警察庁は大同広場周辺の最初の建物でした。でも、これは宮殿前の建築物と比べると、またいくつかの点で違いました。首都警察庁の屋根は日本

の「帝冠様式」の一種類でした。当時の日本では帝冠様式が人気を博し、その一例が愛知県庁だと言われています。<sup>27</sup>しかし、「興亜式」はそれほど実践されることはなかったのです。「興亜式」を実践した建築家たちの記録を読むと、どうも彼らは「興亜式」を使って新しい様式を造りたかったように思われます。

だが、「興亜式」の建物は官庁街以外ではほとんど存在しませんでした。ほかの様式の方がもっと人気があったのです。例えば、関東軍司令部は所謂「帝冠様式」を取っており、その一部には大阪城を思わせるものがありました。もう一つは関東軍司令官の官舎の例ですが、この建物はヨーロッパの伝統様式となっています。

しかし、民間の建築物は近代的な国際様式を示し続けていました。東京海上ビルはその一例です。興業銀行ビルは満電のほうに似ていました。またデパートも「興亜式」ではありませんでした。つまり「興亜式」は結局民衆的にはならなかったということです。

勿論、近代性を示す為に設計者たちはほかの道具も使っていました。例えば、スペースの上手な利用です。新京では公園と緑地が多く、とりわけ緑地は四五〇人当りに一ヘクタールも設けられました。これは北米とほぼ同じで、ヨーロッパの四倍ぐらいでした。当時の東京の緑地は、一〇、七〇〇人当たり一ヘクタールで、京都は四〇、八〇〇人当たり一ヘクタールでしかありませんでした。緑地は公園や道路沿い以外にも色々な

ところに造られました。その結果、新京の郊外で、大きなグリーンベルトが出来、新京特別市の面積は四四〇平方キロメートルになりました。<sup>28</sup>

緑地はもう一つの意味を持っていました。大正初期以来『都市公論』のような雑誌では、工業都市に緑地を増すことを勧めていました。そのため、公園以外にも沢山の緑地をもっている新京はいうまでもなく進歩的な都市になりました。歩道やロータリーに木がよく植えられました。官庁街の南に人工の湖も造られました。また、南嶺では大きいレクリエーションの場が設けられ、野球、ラグビー、テニス、ホッケーなどの運動施設が<sup>29</sup>つぎつぎに建設されました。そして、これらの設計は日本でとてもいい評価を得ました。

このように、新京の町づくりは日本本土の問題をすべて解決し、満州国国都としての新京はほかならぬ文明を進めるモデルとなりました。

さらに、新京はまた経済発展を代表する地域でも成長しました。勿論、新京は工業都市ではなかったけれども、町全体は典型的な日本国都の二の舞になりました。満州国建国直後、新しい国家の経済を統制する為に、政府機構はすぐ膨張し、官僚も多くなりました。多くの会社の本社も大連や奉天から新京に引っ越してきました。大手建設会社もここに来て、町づくりに参加しました。清水建設と小野田セメントが特に関わっていま

した。当然レストランや喫茶店などもすぐに出来ました。こうして、新京はあつという間にミニ東京になりました。

（実を言うと、新京には小さな工業地区もありました。しかし、規模が小さいので、軽工業しか許されなかったのです。そして面白いことに、工業地帯は都市の東北部に設けられました。その理由は東北部では、国都の空気が汚されないように風がスモッグを吹き散らすからです。）

満州国時代の新京の発展は満鉄時代の長春と大きく違っていました。満鉄時代は、長春は商業都市でした。大量の大豆が輸入され、「豆の都市」という通称さえありました。従って、長春から多くの道路と鉄道がひろがり、満州の内地へと繋がっていきました。一九三〇年代の国都新京ではこの交通計画がさらに進められました。その結果、新京は満州国交通の中枢の一つとなりました。

経済発展の為に、もう一つの産業も起りました。満鉄時代には、長春はあまり注目されなかったのですが、新京になって、観光産業が突然生まれました。新京と日本との間の鉄道・飛行機の連結が進んで、国都見学や満州事変跡地見学などを目的とする、バスツアーが多くなりました。JTBの新京支社も創設されました。日本戦後のツーリズムに比べると、観光客の数はそれほど多くなかったけれど、その存在自体が戦後の観光

産業をほのめかしていました。

経済と文化発展の為に教育の充実も必要となりました。満鉄時代には長春付属地で満鉄試験所、図書館そして小・中・高等学校が建てられました。中国人町にも小・中学校が設けられました。満州国の国都はこの教育制度をさらに進め、特に大学教育と中国人・朝鮮人・蒙古人の基礎教育システムも作り上げました。勿論、それに比べて、日本人教育の方が遥かに規模が大きかったけれども、この基礎教育システムは満州国の「民族協和」方針下の第一歩だったと言えます。

新京のもっとも重要な教育展示物は建国大学でした。六五万坪もあるこの大学は建国廟のすぐ南にありました。これは石原莞爾の発案によって設立され、東条英機が満州国の未来の指導部を育成する為に、その組織を創りました。<sup>30</sup>

あいにく、新京にある学校・大学の教科書についての資料は現在殆ど見つかっていません。でも、いろんな雑誌に、それに関する記事がありました。勿論、記事自体は満州国の未来構想に対する宣伝にすぎませんが、教育重視の姿勢は明らかでした。新しい時代に入ったため、新しい教育が必要だったからにほかなりません。<sup>31</sup>従って、新しい町づくりはもっと広い意味において社会的活動と同時進行していました。<sup>32</sup>つまり、満州の首都計画は同時に「民族協和の精神」をもある程度反映していました。

このように、満州国は「理想国家」になる可能性が大きかったです。新しい時代には社会安定の為に新しいやり方も必要でした。満鉄時代ではそれは満鉄警備員と領事館の警察に依存していました。でも、中国人の国家主義の時代においてそれでは足りませんでした。そこで関東軍が考え出した新しい方法はあの悪名高い「協和会」という社会統制の組織でした。これにはいくぶん近代的な要素がありましたが、満州国の設計者たちはその後この協和会でも不十分だと思ようになりました。近代的な都市・社会を推進する為に、傀儡国家をつくるのが解決策として浮かび上がったのです。

近代的な都市・社会を推進することは日本本土の問題解決にも影響を与えました。満州国建国五年後、廬溝橋事件が起きました。その直後、満州国の執政者の一部は帰国し、満州の経験を日本国内の政策に応用して、結局、日本を所謂「暗い谷間」に連れ込んでいきました。その意味で言えば、新京はまさにその為の実験室でありました。

満州の経験の中でもう一つ論じなければならぬことがあります。一〇〇部隊の存在です。国都の南西郊外の孟家屯（モウ・カ・トン；Mengjiatun）という村に、七〇〇人位の日本陸軍が駐屯していました。哈爾濱の七三一部隊のように、この新京の一〇〇部隊も中国人を誘拐し、残酷な実験を行っていました。戦争中、国都の新京の近くで生物化学兵器事件もありました。<sup>33</sup> 満州国の近代性はこのようなものも含まれていると思います。

す。数の多い中国人に対して、陸軍は合理的に生物化学兵器を利用し、全く近代的な対応を用意していました。

近代的な町づくりの裏には、悲しいことに、このような事実も存在していることを忘れてはいけないと思います。

## 5. むすび

長春時代と新京時代の町づくりの経験を見ると、満州に於ける町づくりの活動には二通りの近代性の定義が含まれていることが分かります。一つは満鉄時代の近代性で、もう一つは満州国時代の近代性です。しかし、現実的に両方とも失敗しました。満鉄時代の近代性は中国人と関東軍に敗れました。満州国の近代性はソ連軍に敗れたことになっているけれども、実際は中国人を最後まで服従させることが出来ないまま滅びたと言えます。その上、大多数の日本人も賛成していなかったこともあるかも知れません。満鉄・満州国の執政者は満州に満足して勤められたけれども、それ以外の人は満州において殆ど満足が得られなかったと思います。長春にいた日系人は八百屋さんやパン屋さんとして中国人と経済的に競い合うことが出来ませんでした。満州の経験は日本国家の為



に役に立ったかもしれない、多くの日本人はそれぞれまた別の思いを抱いたまま、帰国していたと思われます。

勿論、満州にはこの二種類の近代性だけが存在していたわけではありませんでした。他の分野を見ると、例えば、天理教の海外布教は明治二六年（一八九三）に始まりますが、満州にもいくつかの天理村をつくりました。ユートピアを約束した新宗教にも新しい生活の理想像が試みられ、それをもとに新しい町づくりも行われました。<sup>34</sup>

旧満州における戦前日本の町づくり活動は重要でした。町づくり活動の行方だけではなく、これを通じて日本人が創ろうとした様々な近代性もそこに反映されています。それに「近代性」という現象は一つの定義だけを含んでいるわけではありません。近代性は多くの姿を持っているので、多重の近代性（マルチプル・モダニティーズ）という言葉を使ったほうがいいかも知れません。

そして、この町づくり活動の延長上に中国人も自らの近代性を造りました。明治日本人のような列強の簡単な模倣ではなく、中国人は寧ろある方法をじっくり選び、日本やほかの列強によく見習った上で、自分の町づくり活動を企てました。それにより、もう一つの近代性が満州に現れました。

長春の場合、このような活動がよく見られます。例えば、大きな公園はあまり必要で

はなかったようで、そこにすぐ建物を立てました。そのため、人口密集率がかなり上がりました。建物については、勿論、忠霊塔は取り崩されましたが、溥儀の宮殿はそれ以前に使命に終わりを告げ、地質学院の校舎となりました。およそ一〇年前までは、満鉄と満州国時代の建築物がまだ沢山長春に残っていました。官庁街の建物は医科大学になったけれども、銀行とデパートはそのまま銀行、デパートとして続いています。勿論、建物と通りの名前は変わりました。大同広場と大同大街はそれぞれ人民広場とスターリン大街に改名し、さらにその後スターリン大街も人民大街に改名しました。

新しい建築にも中国人は取り組んでいました。一九六〇年代「民族形式」という様式が人気になりました。北京大学の一連の建物と一緒に、そのもとも代表的な建築物は北京駅です。長春にもこんな様式がありました。旧満州国官庁街の真中に吉林省図書館が建てられました。満州国の様式ではなく、この建物はとても適切なものでした。昭和二四年（一九四九）に中国人が再び「立ち上がった」ので、この様式は本当の中国の歴史を代表していました。<sup>35</sup>（ところが、ここ二〇年間、もう一つの中国の近代性も出てきたようですが、これについては、また別の機会でお話が出来たらと思います。）

ここ一〇年間、“authentic”（オーセンティック）という言葉がよく使われてきました。満鉄・満州国時代にとって、これはとても大きな意味を持っています。その意味とは簡

単に言えば、正しい近代性かどうかということです。

これまでの内容をまとめてみると、日本人は満州で様々な進歩的な活動をしました。でも、その活動はあくまで日本の為であり、日本帝国にとって、確かにとてもオーセンティックなものでした。しかし、一方、中国人にとって、その活動は大きなマイナスの影響をおよぼしました。だが、中国人がその経験を自分の目的の為に利用することが出来たので、中国大陸において、もう一つの近代性が作り上げられました。そして、それは日本人だけから習ったのではなく、自分の歴史にも配慮した新しいオーセンティックなものにほかなりませんでした。例えば、蒋介石が上海でつくった伝統様式の市役所がまさにその好例でした。

満州における近代性はとても重要でした。実験室としての満州が、様々な近代性を造ることを許していました。一方、満州は植民地だったけれども、日本本土に対して、指導的な役目を演じることも出来ました。

しかし、この満州の町づくりの経験はもう一つのことも考えさせられます。すなわち、進歩的な活動は本当に有益なのか、という疑問です。言い換えれば、どちらの近代性が欲しいのかということです。京都の場合は、この質問が特にふさわしいでしょう。最近、未来派的な建物の場所をあける為に、京都の古い町屋が少しずつ消えています。確かに、

建築の立場から、この百年来、京都にも様々な近代的な町づくり活動が行われてきました。<sup>36</sup>ところが、現実的には建物だけが消えるものではありません。建物と共に、一つの地域社会がまったく別のものにとって代わられてしまうのです。町づくり、そしてこの活動に含まれる沢山の意味合いをもっと真剣に、綿密に考えたほうがいいのではないかと思います。

## 註

- 1 越沢明著『満州国の首都計画 東京の現在と未来を問う』東京、日本経済評論社、一九八八年。
- 2 越沢明著『東京都市計画物語』東京、日本経済評論社、一九九一年（文庫本：東京、筑摩書房、二〇〇一年）。
- 3 大江志乃夫（ほか）編『近代日本と植民地』東京、岩波書店、八卷、一九九二—一九九三年。
- 4 越沢明著『満州国の首都計画 東京の現在と未来を問う』東京、筑摩書房、二〇〇二年。
- 5 安彦良和著『虹色のトロツキー』東京、潮出版社、一九九二年。
- 6 西澤泰彦著「書評：満州国の首都計画」『アジア経済』三八号、一九八九年八月、pp.109-113。
- 7 満史会編『満州開発四十年史』東京、満州開発四十年史刊行会、一九六四—一九六五年。
- 8 松本武祝著「朝鮮における「植民地的近代」に関する近年の研究動向」『アジア経済』四三号、二〇〇一年九月、pp.31-45。
- 9 『満州開発四十年史』一巻、p.84。

- 10 満州開拓史刊行会『満州開拓史』東京、満州開拓史刊行会、一九六六年、p.827。
- 11 越沢明著『植民地満州の都市計画』東京、アジア経済研究所、一九七八年。ロシアの帝国の起源については次の記事にも言及している…曲曉範著「中東鉄道及びその付属地と近代における東北地域の都市化」『環日本海研究年報』八号、二〇〇一年三月。
- 12 長春についての戦前・戦後の研究があります。日本語で長春の歴史的な概観は越沢著『満州国の首都計画』、西沢泰彦著『図説「満洲」都市物語―ハルビン・大連・瀋陽・長春』東京、河出書房新社、一九九六年。戦前の出版された物の中に次の本が含まれます…泉廉治著『長春事情』長春、長春日報社、一九一二年、『新京事情』新京、新京日報社、一九三四年、満鉄総裁地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』東京、富士ゼロックス、一九七七年（元来一九三九年）、新京特別市長官房庶務科編『國都新京』新京、新京特別市公署、一九四二年、横山敏男著『新京郵便』肇書房、一九四二年。この都市の生活を發揮している本…谷深雪著『長春物語』名古屋、三ッ谷幸雄、一九八九年、藤瀬隆幸著『長春 新京 羽衣町』鹿児島、藤瀬隆幸、一九九三年。この都市についての写真集も出版されました…国分修編『さらば新京』東京、国書刊行会、一九七九年、北小路健文、渡部まなぶ写真『長春・吉林』東京、国書刊行会、一九八二年。英語で、William S. SEWELL, "Japanese Imperialism and Civic Construction in Manchuria: Changchun, 1905-1945," Unpublished Ph.D. dissertation, University of British Columbia, 11000年。
- 13 佐藤昌著『満州造園史』東京、日本造園修景協会、一九八五年、pp.81-82。
- 14 北岡伸一著『後藤新平…外交とヴィジョン』東京、中央公論社、一九八八年。
- 15 越沢明著『満州国の首都計画』pp.61-62。

- 16 西澤泰彦著『海を渡った日本人建築家：二〇世紀前半の中国東北地方における建築活動』東京、彰国社、一九九六年。
- 17 Henry-Russell HITCHCOCK and Philip JOHNSON, *The International Style*, New York: W. W. Norton & Co., 一九九五年。
- 18 山室信一著『キメラ—満洲国の肖像』東京、中公新書、一九九三年、pp.24-35。
- 19 朴永錫著『万宝山事件研究—日本帝国主義の大陸侵略政策の一環として』東京、第一書房、一九八一年。
- 20 南満州鉄道株式会社土木課編、『南満州鉄道株式会社土木十六年史』大連、南満州鉄道株式会社、一九二六年、p.30。
- 21 満洲青年連盟を創設する運動者の中には小澤開作という齒科医がいて、満洲国の建設に情熱を注ぎました。彼は満洲事変が立案されたことを誇りに思っ、板垣征四郎の「征」と石原莞爾の「爾」をとって、息子の名前をつけました—この息子はのちに世界的に有名な指揮者になった—小澤征爾さんです。昭和一〇年（一九三五）、彼は旧奉天（現在瀋陽）に生まれていました。
- 22 満洲帝国臨時国都建設局編『国都建設について』東京、満洲帝国臨時国都建設局、一九四〇年。
- 23 西澤泰彦著『海を渡った日本人建築家』。
- 24 満鉄経済調査会『新京都市建設方策』南満州鉄道株式会社、一九三五年、p.24。
- 25 満鉄経済調査会『新京都市建設方策』、越沢明著『満洲国の首都計画』pp.164-168。
- 26 新京の建物・都市計画についての写真・記事が一九三〇年代で『満洲建築雑誌』に特に多く掲載されました。その他の多くの記事は『都市公論』と『都市問題』という雑誌にも掲載されました。

- 27 井上章一著『アート・キッチュ・ジャパネスク 大東亜のポストモダン』東京、青土社、一九八七年、井上章一著「第三帝国様式、そして帝冠様式」『ユリイカ』一九号（一二）、一九八七年、pp.204-211。
- 28 満鉄経済調査会『新京都市建設方策』pp.62-63。
- 29 総重建築連名「満州建築の展望」『現代建築』八号、一九四〇年一月、p.3。
- 30 宮沢恵理子著『建国大学と民族協和』東京、風間書房、一九九七年。
- 31 例えば、建国大学の『建国』、大同学院の『論争』。
- 32 内藤太郎著「躍進満州国の文化と建築」『満州建築雑誌』一七号、一九三七年一月、pp.4-5。
- 33 高杉晋吾『七三一部隊細菌戦の医師を追え』東京、徳間書店、一九八二年、pp.180-96。Sheldon H. HARRIS, *Factories of Death: Japanese Biological Warfare, 1932-1945, and the American Cover-Up*, London: Routledge, 一九九四年、pp.84-100。
- 34 五十嵐太郎著『新宗教と巨大建築』東京、講談社現代新書、二〇〇一年、pp.91-93。
- 35 「中国人從此站起来了」と言う有名な言葉を毛澤東が一九四九年九月二二日に言いました。
- 36 京都建築倶楽部編『モダン・シティー・KYOTO』京都、淡交社、一九八七年。

## 発表を終えて

国際交流基金と国際日本文化研究センターに研究の成果を発表する機会を与えていただき、大変ありがたく思います。皆様からのご意見を伺うこともできて、大変貴重な経験となりました。劉先生、カーン先生にもご指導、ご協力を賜り心からお礼を申し上げます。

発表の当日はあいにくの大雨にもかかわらず、予想を超える大勢の方々にご出席いただき感激しておりました。

京都滞在の十カ月は私にとって忘れられない日々となりました。有難うございます。





日文研フォーラム開催一覧

回	年 月 日	発 表 者・テ ー マ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ Alessandro VALOTA (ピサ大学助教授) 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11	エンゲルベルト・ヨリッセン Engelbert JORIβEN (日文研客員助教授) 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン Lee A. THOMPSON (大阪大学助手) 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19	フォスコ・マライーニ Fosco MARAINI (日文研客員教授) 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14	SONG Whi Ch'il 宋 曩七 (慶北大学校師範大学副教授) 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9	セップ・リンハルト Sepp LINHART (ウィーン大学教授) 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11	スーザン J. ネイピア Susan J. NAPIER (テキサス大学助教授) 「近代日本小説における女性像—現実と幻想」
⑧	63.12.13	ジェームズ C. ドビンス James C. DOBBINS (オベリン大学助教授) 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡」
⑨	元. 2.14 (1989)	YAN An Sheng 嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11	LIU Jingwen 劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9	スザンヌ・ゲイ Suzanne GAY (オベリン大学助教授) 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13	HSLA Gang 夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに—」

⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコワント Ernst LOKOWANDT (東洋大学助教授) 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8	キム・レーホ KIM Rekho (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12	ハルトムート O. ローターモンド Hartmut O. ROTERMUND (フランス国立高等研究院教授) 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3	WANG Xiangrong 汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14	ジェフリー・ブロードベント Jeffrey BROADBENT (ミネソタ大学助教授) 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」
⑱	元.12.12	エリック・セズレ Eric SEIZELET (フランス国立科学研究所助教授) 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ Sumie JONES (インディアナ大学準教授) 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13	カール・ベッカー Carl BECKER (筑波大学哲学思想学系外国人教師) 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10	グラント K. グッドマン Grant K. GOODMAN (カンザス大学教授・日文研客員教授) 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8	イアン・ヒデオ・リービ Ian Hideo LEVY (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12	リヴィア・モネ Livia MONNET (ミネソタ州立大学助教授) 「村上春樹：神話の解体」
㉔	2. 7.10	L.I. Guodong 李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉕	2. 9.11	MA Xing-guo 馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) 「正月の風俗—中国と日本」
㉖	2.10. 9	ケネス・クラフト Kenneth KRAFT (リーハイ大学助教授) 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ Ahmed M. FATTHY (カイロ大学講師) 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ Karel FIALA (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12	アレクサンドル A. ドーリン Aleksandr A. DOLIN (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5	ウイーベ P. カウテルト Wybe P. KUITERT (ワーゲニンゲン大学研究員) 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
31	3. 4. 9	ミコワイ・メラノビッチ Mikołaj MELANOWICZ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14	ベアトリクス M. ボダルト・ベイリー Beatrice M. BODART-BAILEY (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) 「三百年前の京都—ケンペルの上洛記録」
33	3. 6.11	サトヤ B. ワルマ Satya B. VERMA (ジャワハルラー・ネール大学教授・日文研客員教授) 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9	ユルゲン・ベルント Jürgen BERNDT (フンボルト大学教授・日文研客員教授) 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」
35	3. 9.10	ドナルド M. シーキンス Donald M. SEEKINS (琉球大学助教授) 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
36	3.10. 8	WANG Xiao Ping 王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) 「中国詩歌における日本人のイメージ」
37	3.11.12	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」

③⑧	3.12.10 (1991)	HOONG YoonSik 洪 潤植 (東国大学校教授) 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サ ウ イ ト リ ・ ウ イ シ ュ ワ ナ タ ン Savitri VISHWANATHAN (デリー大学教授・日文研客員教授) 「インドは日本から遠い国か?—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10	ジ ャ ン = ジ ャ ッ ク ・ オ リ ガ ス Jean-Jacques ORIGAS (フランス国立東洋言語文化研究所教授) 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14	リ ブ シ ュ ・ ボ ハ ヲ フ モ コ ヴ マ フ Libuše BOHÁČKOVÁ (プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授) 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12	ポ ー ル ・ マ ッ カ ー シ ー Paul McCARTHY (駿河台大学教授) 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」
43	4. 6. 9	G . カ メ ロ ン ・ ハ ー ス ト Ⅲ G. Cameron HURST Ⅲ (ニューヨーク市立大学リーマン広島 校学長・カンザス大学東アジア研究所長) 「兵法から武芸へ—徳川時代における武芸の発達—」
44	4. 7.14	Yoshio SUGIMOTO 杉本 良夫 (ラトロープ大学教授) 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8	WANG Yong 王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授) 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13	LEE Young Gu 李 榮九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10	ウィリアム D. ジョンストン William D. JOHNSTON (ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本疾病史考—『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8	マ ノ ジ ュ し . シ ュ レ ス タ Manoj L. SHRESTHA (甲南大学経営学部講師) 「アジアにおける日系企業の戦略転換 —技術移転をめぐる—」

④9	5. 1.12 (1993)	PARK Jung-Wei 朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9	マーティン・コルカット Martin COLLCUTT (プリンストン大学教授・日文研客員教授) 「伝説と歴史の間—北條政子と宗教」
⑤1	5. 3. 9	Yoshiaki SHIMIZU 清水 義明 (プリンストン大学マーカンド荣誉教授) 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリアー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
⑤2	5. 4.13	KIM Choon Mie 金 春美 (高麗大学校教授・日文研来訪研究員) 「日本近代知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5.11	タキエ・スギヤマ・リブラ Takie SUGIYAMA LEBRA (ハワイ大学教授) 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8	H. W. KANG 姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) 「変革と選択: 10世紀の日本と朝鮮 —科举制度をめぐって—」
⑤5	5. 7.13	ツベタナ・クリステワ Tzvetana KRISTEVA (ソフィア大学教授・日文研客員教授) 「涙の語り—平安朝文学の特質—」
⑤6	5. 9.14	KIM Yong-Woon 金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12	オロフ G. リディン Olof G. LIDIN (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9	マヤ・ミルシンスキー Maja MILČINSKI (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) 「無常観の東西比較」
59	5.12.14	ウィリー・ヴァンドゥワラ Willy VANDEWALLE (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) 「日本・ベルギー文化交流史—南蛮美術から洋学まで—」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン J. Martin HOLMAN (ミシガン州立大学連合日本センター所長) 「自然と偽作—井上靖文学における『陰謀』—」

61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ Maya GERASIMOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8	オギュスタン・ベルク Augustin BERQUE (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12	リチャード・トランス Richard TORRANCE (オハイオ州立大学助教授) 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10	シルバーノ D. マヒウオ Sylvano D. MAHIWO (フィリピン大学アジアセンター準教授) 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14	LIU Jian Hui 劉 建輝 (南開大学副教授・日文研客員助教授) 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12	チャールズ J. クイン Charles J. QUINN (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」
67	6. 9.13	フランソワ・マセ François MACÉ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥8	6.11.15	JIA Hui-xuan 賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20	PENG Fei 彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル V. ウスペンスキー Michail V. USPENSKY (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) 「根付—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクション を中心に—」
⑦1	7. 2.14	YAN Shao Dang 嚴 紹璽 (北京大学教授・日文研客員教授) 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのか かわり—」

72	7. 3.14 (1995)	WANG Jiahua 王 家驊 (南開大学教授・日文研客員教授) 「洪沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
73	7. 4.11	アリソン・トキタ Alison TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「日本伝統音楽における語り物の系譜—旋律型を中心に—」
74	7. 5. 9	リュドミラ・エルマコワ Lioudmila ERMAKOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) 「和歌の起源—神話と歴史—」
75	7. 6. 6	パトリシア・フィスター Patricia FISTER (日文研客員助教授) 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25	CHOI Kil-Sung 崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) 「『恨』の日韓比較の一考察」
77	7. 9.26	SU Dechang 蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) 「日中の敬語表現」
78	7.10.17	LI Jun Yang 李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) 「雷神思想の源流と展開—日・中比較文化考—」
79	7.11.28	ウィリアム・サモニデス William SAMONIDES (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
80	7.12.19	タチヤナ・ソコロワ・デリュシナ Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA (翻訳家・日文研来訪研究員) 「俳句の国際性—西欧の俳句についての一考察—」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク John CLARK (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」
82	8. 2.13	ジェイ・ルービン Jay RUBIN (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12	イザベル・シャリエ Isabelle CHARRIER (神戸大学国際文化学部外国人教師) 「日本近代美術史の成立—近代批評における新語—」

⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン Leith MORTON (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28	マーク・コウディ・ポールトン Mark Cody POULTON (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11	フランシスコ・ハビエル・タブレロ Francisco Javier TABLERO (慶應義塾大学訪問講師) 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30	シルヴァン・ギニヤール Silvain GUIGNARD (大阪学院大学助教授) 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10	ハーバート E. プルチヨウ Herbert E. PLUTSCHOW (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1	WANG Xiu-wen 王 秀文 (東北民族学院助教授・日文研客員助教授) 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」
90	8.11.26	WANG Bao Ping 王 宝平 (杭州大学日本文化研究所副所長・日文研客員助教授) 「明治期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨1	8.12.17	CHEN Shen Bao 陳 生保 (上海外国語大学教授・日文研客員教授) 「中国語の中の日本語」
⑨2	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシエリヤコフ Alexander N. MESHCHERYAKOV (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪研究員) 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18	KWAK Young-Cheol 郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) 「言語から見た日本」
⑨4	9. 3.18	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL (スペイン・マドリード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) 「弁当と日本文化」



95	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・ド・マルラ Michele F. MARRA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校準教授・日文研客員助教授) 「弱き思惟—解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13	デニス・ヒロタ Dennis HIROTA (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 パークレー仏教研究所準教授) 「日本浄土思想と言葉 —なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9. 6.10	ヤン・シ・コラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」
98	9. 7. 8	キンヤ・ツルタ 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9	ポーリン・ケント Pauline KENT (龍谷大学助教授) 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14	セオドア・ウィリアム・グーゼン Theodore William GOOSSEN (ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11	KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) Livvia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シ・コラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授) キンヤ・ツルタ 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9	ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授) 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

⑩4	10. 2.10 (1998)	GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授) 「中世禪林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3	シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授) 「和魂漢才、和魂洋才——語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7	スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19	リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) 「映画と文学の間に——金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩8	10. 6. 9	Hiroshi SHIMIZU 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) 「化粧の文化地理」
⑩9	10. 7.14	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ莊子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ——詩的イメージとしての典故——」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リナーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪①	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』——安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪②	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化——芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪④	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて——宇宙論からのアプローチ」

115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪⑩	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪⑧	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顯陵詩」
119	11. 6. 8	マリ ア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑪⑨	11. 7.13	R E E C E Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑪⑪	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑪⑫	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑪⑬	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑪⑭	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

⑫5	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫6	12. 2. 8	LEE Eung-soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ マリア・トレニッシュハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫8	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユウスカラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」
⑫9	12. 5. 9	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑬0	12. 6.13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬2	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬4	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」

136	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
138	13. 4.10	李 <sup>L.I</sup> 卓 <sup>Zhuo</sup> (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
139	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」
140	13. 6.12	徐 <sup>XU</sup> 蘇 <sup>Su</sup> 斌 <sup>bin</sup> (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
142	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	官 <sup>GUAN</sup> 文 <sup>Wen</sup> 娜 <sup>Na</sup> (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサキ・ムラステイブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
146	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」

⑭	14. 2.12 (2002)	マシミリアーノ ト マ シ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 恵卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フリップ マッケルウエイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」
150	14. 5.14	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑮	14. 6.11	ル 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボ ロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
153	14. 9.10	YEE Mijim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
155	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」

157	15. 1.14 (2003)	デビッド L. ハ ウ エ ル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊仇討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 晓梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オ カ ダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉? : 言語と国民国家」
160	15. 4. 8	ビル ス ウ エ ル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 銓烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボ イ カ エリト ツ イ ゴ バ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダ ニ エ ル ス Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
165	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

\*\*\*\*\*

発行日 2003年11月10日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075) 335-2048  
ホームページ: <http://www.nichibun.ac.jp>

\*\*\*\*\*

© 2003 国際日本文化研究センター





■ 日時

2003年 4 月 8 日（火）

午後 2 時～ 4 時

■ 会場

国際交流基金 京都支部

第一の回 旧満州における戦前日本の町づくり活動

国際日本文化研究